

主 題：感謝の人生・実践編：兄弟姉妹に対して2
 聖書箇所：ローマ人への手紙 12章10-11節

まず、ヨハネが語った彼のメッセージをもう一度皆さんといっしょに覚えたいと思います。ヨハネの手紙第一4：9-11で彼はこのように言います。「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。：10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。：11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」と、パウロが私たちに教えているのと同じことをヨハネはこのように教えました。主イエス・キリストが私たちをどれ程大きな愛で愛してくださっているのか、どれ程の大きな犠牲のもとに私たちは愛されているのか、その愛を覚えるときに、私たちは主が望んでおられるように兄弟姉妹を愛する者へと変えられていくと言うのです。

前回私たちは、我々が目標とする愛についてのパウロの説明を聞きました。「私たちはこのような愛を求め、このような愛を追究すべきだ。」と。そして、その後、パウロは我々信仰者が実践すべき愛の具体的な形を教え、私たちはそれを見て来ました。なぜ、パウロは具体的に「このように歩むべきです。このように生きるべきです。」と教えたのでしょうか？そこが一番大切だからです。私たちは愛について語ることができるでしょう、また、愛について説教をすることができるかもしれませんが、しかし、問題は愛を実践しているかどうかということです。私たちがみことばを学んでゆくときいつも教えられることは、そのみことばを通して示される神のみこころに我々が従っていくかどうかです。ただ、聞くだけの者であってはならないと言うのです。でも現実には、聞くだけの者が多いということです。みことばを聞いても聞いても実践しなかったら、私たちはいつまで経ってもみことばの真理を、そして、みことばを教えられた主のすばらしさを味わうことがありません。我々は変わって来ないのです。しかし、皆さんもなさっておられるように、主の助けをいただきながらみことばを実践するときに、確かに、主は生きておられる、確かに、主は真実なお方であることを教えられ続けて行きます。我々の信仰は成長して行くのです。

ですから、パウロはこのローマ書12章の中でも、ただ「愛」を語るだけでなく、その愛を具体的にどのように実践していくべきなのか、その具体例を挙げているのです。

A. 真実の愛 — 我々の目標：「愛には偽りがあるてはなりません」 9節

最初に、彼は私たちに「我々の愛は真実な愛でなければならない。偽善的であってはならない。愛していると言いながら、愛を実践していないようなことがあってはならない。」と言いました。なぜ、そのようなことを私たちに教えるのでしょうか？それは主ご自身の愛が真実な愛だったからです。主は真実の愛をもって私たちを愛してくださった。偽善的ではなくて心からの愛でした。

B. 真実な愛の実践： 道徳面において 9節

また同時に、私たちが学んだことは「愛を実践する」ということを考えるときに、当然、道徳面においても考えておかなければいけないということでした。パウロが教えたことは「悪を憎み、善に親しみなさい」ということでした。

1. 悪を憎み 9節

「悪を憎む」とは、主が悪を憎んでおられるように、我々も悪に対して激しい憎悪の感情を現わしていくこと、そこまで徹底的に憎むのです。私たちはどこかに甘い部分があったりします。「みんなやっているから…、我々も弱いから…」と、そのように罪を容認してしまうことがあるのですが、パウロが言うことは「徹底的に罪を憎みなさい」です。そして、この「罪を憎む」ということばの中には、それらの罪から完全に分離するという思いが強調されているということを見ました。「悪から離れなさい、悪から徹底的に離れて行きなさい」と。

2. 善に親しみなさい 9節

そして、却って、今度は「善に親しみなさい。」と言います。「親しむ」とは「くっつく、固く結びつける」ということでした。アロンアルファでしっかりと結びつけられてもう離れることがないのです。結婚のたとえを私たちは聖書の中に見ます。もう決して離れることがない、そのような強い絆のことです。善に対して、そのように密着したものとして我々から離れないようにしていきなさいと言うのです。

C. 愛の実践： 兄弟姉妹との関係との関係において 10-11節

そのようなことを教えたパウロは、今度は愛の実践、特に、兄弟姉妹の間における愛の実践について

10項目教えています。非常に長いリストですが、私たちはしっかりと見ていきたいと思えます。

1. 兄弟愛をもって心から互いに愛し合い

10節を見ると最初の実践が出て来ます。「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い」とあります。「兄弟愛をもって」とは、イエス・キリストを信じる者たち、クリスチャンたちが「兄弟」として互いに愛し合う愛のことを言っているのです。パウロがなぜこのことを命じたのかというと、イエス・キリストを信じる者たち、私たちは神の家族だからです。そのことを次に記している「互いに愛し合う」ということばによってパウロは補足しています。この「互いに愛し合い」という「愛し」ということばは「アガペー」の愛ではありません。ここで使われているのは「親しい」と「肉親間の愛」という二つのことばが合成してできたことばです。ですから、家族の間における、肉親の間におけるその優しい愛のことです。親子がもつ愛情、兄弟たちがもつ愛情、それらをここでパウロは言うのです。これもイエスを信じる私たち、この群れに属する私たちはみな信仰の家族、神の家族であるから、そのような愛をもって互いに愛し合いなさいと言うのです。ガラテヤ6：10には「ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。」と記されています。「信仰の家族」とあります。私たちはその家族に属しています。イエスを信じているあなたは、その家族に属しているのです。ヨハネもこのように教えています。Iヨハネ5：1「イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。」と。

ですから、最初にパウロが言わんとしたことは分かりました。自分の肉親を愛するように、兄弟を愛するように、イエス・キリストを信じる群れに属している兄弟姉妹をそのように愛しなさい、そのような愛をもって愛していきなさいと、そのように教えるのです。しかし、実際に、人を愛することは何度も見てきたように容易なことではありません。非常に難しいことです。それは家族の中でも実践することは難しいのです。だから、問題のある家庭が私たちの周りに溢れているのです。肉親であってもなかなか愛せない、それが現実です。

兄弟愛の実践：

では、どうすれば私たちはパウロが言っている神のみこころを実践することができるのでしょうか？そのカギは「主のみこころに従って行くこと」です。もし、私たちが主のみこころに従って歩んでいくなれば、今、私たちが見ている兄弟姉妹を愛するという、このような生き方の実践を見ることになります。というのは、兄弟愛をもって愛し合うことは、実は、神が教えてくださることだからです。テサロニケの教会のことをパウロは次のように称賛しています。Iテサロニケ4：9「兄弟愛については、何も書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちだからです。」、互いに愛し合うことを神から教えられたと言うのです。神が教えてくださるのです。つまり、私たちが神のみこころに従って歩んでいくなれば、何が起こるかということ、主はあなたを主イエスに似た者に変えてくださるのです。主イエス・キリストは、ご自分を十字架に磔にした兵士たちに対しても愛を示されました。その完全な真実な愛をもって私たちが人を愛するには、私たち自身がそのキリストの愛によって変えられていかなければいけないのです。主イエス・キリストは、我々の模範であり、我々はその主に似た者へと日々変えられて行きます。でも、それが現実のものとなるためには、我々はみこころに従わなければいけないのです。我々はこうして毎週聖書の学びを受けています。それは人間の話聞くのではなくて、神のおことばが何を言っているのか、それを正しく見ようとしているのです。なぜなら、それが神のみこころだからです。

みこころとは、私たちに何か幻でもって示されたり、特別な啓示が与えられたりと、そのようなものではないのです。みこころは私たちの目の前にあるのです。この聖書に記されているのが神のみこころです。そして、あなたが神の御霊に従って、言い方を変えれば、みこころに従って歩んでいくなれば、主があなたの内に重荷をもってみこころを教えていってくださるのです。テサロニケのクリスチャンたちは、主から兄弟姉妹を愛することを学んだと言います。なぜなら、彼らは主のみこころに従って歩んでいたからです。ですから、愛において成長しようとするならどうするのか？しっかりとみことばを学び、主のみこころに、主の助けをいただきながら歩んで行くことです。そうするとあなたは日々変えられていきます。そうするとあなたはこの約束、この教えがあなたの内で為されていくこと、あなたがそのような人に変えられていくことをあなた自身が経験するのです。

2. 尊敬をもって互いに人を自分よりもまさっていると思いなさい

このようにパウロは教えますが、難しいことを教えている訳ではありません。尊敬をもって敬意をもって、敬意を払いながら人を自分よりもまさっていると思いなさい、自分よりも周りの人たちがまさっていると思って生きなさいと言うのです。この「思いなさい」ということばは非常におもしろいことば

です。「先に行く、先達、先導する」という意味のことばです。パウロが言いたかったことは、互いに尊敬し合い、人が自分よりも優れている、また、人を自分よりも高く評価することにおいて先導しなさい、つまり、あなたがその模範を示しなさいということです。そのことをパウロはこのローマの人々に勧めているのでしょうか。あなたが謙遜に人々に仕える者として歩いて行きなさいと。

どうも、このプライドは私たち人間にとっての大きな問題です。弟子たちの間でもいつもこの問題が出ていました。マタイ 18 : 1-4 にこのように記されています。「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て言った。「それでは、天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか。」 :2 そこで、イエスは小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真中に立たせて、 :3 言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。 :4 だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。」と、イエスはこのように教えられました。また、同じマタイ 23 : 11-12 (20 : 26-27) にも「あなたがたのうちの一番偉大な者は、あなたがたに仕える人でなければなりません。 :12 だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。」 (20:26 あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。 :27 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。) と記されています。もし、私たちが自分は非常に謙遜な人間だと思ったそのとき、私たちは謙遜ではないのです。私たちはどれ程プライドの高い者であるか、パウロはピリピ 2 : 3 で「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」と教えています。あなたの周りのすべての人が、あなたよりも優れた者であると思いなさいと言います。言われていることはよく分かります。しかし、実践は非常に難しいことです。

テスト :

皆さんに質問したいことがあります。皆さんは、たとえば、人から非難されたり、人から悪口を言われたりするとき (悲しいことですが、そのようなことが起こります)、そのときに皆さんはその人に対して腹を立てますか? そのように言われていることに対して腹を立てますか? 「どうしてあの人から言われなければいけないのか、なぜ、あんなことを言うのだろうか?」と、それがどんな非難であろうと、どんな悪口であろうと、私たちがそれに対して腹を立てるということは、私たちは自分の本当の姿を知らないからです。思い出しませんか? 主ご自身がこんなことを言われました。マタイ 5 : 3-5 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。 :4 悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。 :5 柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。」、イエスは何を言われたのでしょうか? どのような人が神の前に祝される人か? その人は本当の自分を知っている人です。自分自身のどこを見ても罪に染まっている、私はどんなに努力しても、いかなる働きをしても神を喜ばせることができない者だと分かっているのです。

私の中には神の前に誇れるものは何一つない。罪に染まっている、罪に汚れた大変な者だ。救われる値打ちなど全くない者であり、地獄が一番相応しい者であると。そのことを知っている自分は、どんな批判を浴びても次のことを思うのです。「この人たちは本当の私を知らない。どんなに酷いことを言われても、私はそれ以上酷い者だ。」と。そのような人が神の前に喜ばれる人だと言われるのです。でも、私たちは「いいえ、そんなことはない。あの人よりはマシだ。そのように言っているあの人も私と同じことをしている。」と反論します。私たちはどうしても自分の内にあるプライドが大切な自分が傷つくことを赦しません。大切な自分がそのように見られることを赦しません。しかし、神の目で自分を見るならば、そこに存在しているのは、罪に汚れて何の価値もない罪人の姿です。

だから、イエスは「心の貧しい者は幸いです。…悲しむ者は幸いです。…柔和な者は幸いです。」と教え、まさにこのような人こそ救われていることを現わしているのです。だから、様々な批判に対して怒らないだけではないのです。かつての自分なら、そのようなことには耐えられませんでした。しかし、我々は救われることによって、自分を誇っていたかつての自分から、今度は、私のような者を救ってくださった主を誇る者へと生まれ変わったのです。ちょうど、パウロが言うように「もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります。」 (Ⅱコリント 11 : 30) と。また、パウロはこのように言います。ガラテヤ 6 : 14 「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。」。パウロは自分の学歴を誇ることができました。自分の家系を誇ることができました。しかし、「それらは全く虚しいこと、私の誇りはただ一つ、こんなどうしようもない罪人を救ってくださった神、この方だけが私の誇りだ。」と言ったのです。

どうですか、信仰者の皆さん。あなたはご自分のことを「もっと教えてください」と神に祈っていますか? 「神さま、私はもっと自分のことを知りたい。自分がいかに汚れた者であるかを知りたい。」と。なぜなら、私たちは本当の自分を知ることによって、より主に対する感謝が増し加わるからです。私た

ちはどこを見ても救われる資格はありません。そのような価値は私たちのうちにはありません。一方的に神があなたや私を救ってくださった。そのことを感謝するにも、私たちは神がご覧になっておられるように自分を正しく見る必要があります。「心の貧しい者は幸いです。」、皆さん、是非考えてください。自分のところが何かに対して怒っているのなら、なぜ、怒っているのか？いろいろな人の批判に対して怒っているのなら、なぜ、怒っているのか？と。主が望んでおられること、主のみこころは「尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい」です。私の周りにいるすべての人たちに。そのように告白できるのは、自分を正しく知っているからです。

この後11節を見ると、「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。」とあり、どうもパウロはここで「主に仕える」ことをより具体的に表わすために、その前に二つの表現を用いているようです。それぞれ一つずつ見て行きます。

3. 勤勉で怠らず 11節

この「怠らず」とは「怠惰、怠け」のことです。ソロモンは言いました。箴言6：6「なまけ者よ。蟻のところにいき、そのやり方を見て、知恵を得よ。」と。また、同じ箴言6：9でも「なまけ者よ。いつまで寝ているのか。いつ目をさまして起きるのか。」と、26：13-16には「なまけ者は「道に獅子がいる。ちまたに雄獅子がいる。」と言う。：14 戸がちょうつがい回転するように、なまけ者は寝台の上でころがる。：15 なまけ者は手を皿に差し入れても、それを口に持っていくことをいとう。：16 なまけ者は、分別のある答えをする七人の者よりも、自分を知恵のある者と思う。」と記されています。このような怠惰であってはならない、却って、勤勉であるようにと命じるのです。

「勤勉」とは、「熱心、急いで、真剣に」という意味です。怠けるのではなく熱心でありなさい、急いで、しかも、真剣でありなさいと、そのようにパウロが叫んでいるように聞こえます。なぜ、パウロはそのようなことを言わんとしたのでしょうか？理由は明白です。働けるときが日々少なくなって来ているからです。ヨハネ9：4を見てください。「わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行なわなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。」とあります。皆さん、よく考えてみて、私たちは地上にあとどれだけいるのでしょうか？今日が最後かもしれない。肉体的な死を迎える可能性があります。主イエス・キリストの再臨が今日あるかも知れない。少なくとも、昨日よりその現実、その事実は私たちに近づいて来ます。

ですから、エペソ人への手紙5章で言われているその教えに目をとめていただきたいと思います。5：15-16「そういうわけですから、賢くない人のようにはではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、：16 機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。」

(1) 賢い人のように歩みなさい

賢い人とは、IQが高い人のことではないことは明らかです。ここで言われている「賢い人」、神の前に賢い知恵のある人は、神の教えを自分の生き方に適用している人です。知恵のある人、みことばの実践ができています。そして、自分の歩みを「よく注意しなさい」とあります。

(2) 機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。

パウロは「我々の一生、また、この地上の生活は非常に短いから無駄のないように生きなさい。」とそのように教えるのです。「無駄のないように、機会を十分に生かして用いなさい」とは、すべての機会を良いことを行なうための機会として用いなさいということです。ということは、もう私たちは何度も学んでいるのでよく分かっていることですが、私たちはこの私たちの主のすばらしさを宣べ伝えるためにこの救いに与ったわけです。神があなたを罪から救い出してくださったのは、この偉大な神のことを人々に伝えていくためです。それがあなたが救われた理由なら、それがあなたに今日という一日が与えられている理由ならば、我々は機会を十分に生かして、その働きを為すことです。神は今日という一日を与えてくださった、何のために？あなたを救い、あなたを生かして下さっている目的を、あなた自身が果たすためです。

ですから、私たちはこのような祈りをもって日々を過ごしたいものです。「主よ、どうぞ今日、私を使ってください。あなたを知らない人が私の周りに溢れています。いろいろな人に今日私は出会いますから、どうぞ、その機会を無駄にすることなく、あなたのすばらしさを彼らに伝えることができるように私を助けてください。」と、そのような祈りをもって歩んでいる皆さんは、その時間を無駄にすることがなく、だれかと電話で話すときもその祈りをしているのです。「どんなふうに伝えたらいいのでしょうか？」と。だれかと話をしているときも、それが雑談であっても心の中で祈っているのです。「神さま、機会をください。この人とのこの会話の時間を何とかあなたのすばらしさを証する機会として用いることができるように。」と。パウロはそのことを教えたのです。エペソ書で教えたこと、そして、こ

のローマ書 12 章で教えていることは「勤勉で怠らず、あなたに与えられたこの大切な務めを、熱心に忠実に、時間を無駄にすることなく、機会を無駄にすることなく果たして行きなさい。」です。

(3) タラントのたとえ

もう一つ、イエスはあるたとえをお話になりました。マタイの福音書 25 章に出て来ることです。しもべたちに五タラント、二タラント、一タラントを預けて旅に出た主人の話です。皆さんよくご存じのことです。それぞれにタラントを与えたと記しています。与えられた者たちに責任が生じたのです。主から託されたその務めを忠実に果たすという責任です。しもべたちを呼んで自分の財産を預けた主人は、おもしろいことに「**おのおのその能力に応じて**」タラントを与えたとあります。つまり、何を意味するかというと、ここで言われているのはお金のことでないことは明らかです。それぞれに主から与えられた務め、働きがあるということです。主がイエスを信じるあなたに務めを与えてくださるのです。しかも、その与えられた務めとは、それぞれの能力に応じて、つまり、神はあなたや私の限界を知っておられるのです。どれだけできるか知っておられるのです。それに合わせて与えてくださると言うのです。だから、できないことを神は私たちに託しておられるのではないのです。命じてはおられません。私たちに可能なことを神は私たちに命じておられるのです。

五タラント預かったしもべと二タラント預かったしもべを見ると共通していることがあります。それは、それが与えられたときに彼らは、これは主ご自身から私に与えられたものだと自覚して、それがすばらしい特権であるとしっかり理解した上ですぐに働きを始めていったことです。25 : 16 に「**五タラント預かった者は、すぐに行って、**」とあります。二タラント預かった者も同じです。彼らはすぐに出て行くのです。このような信仰の反応を私たちは見るのです。彼らは主から命じられたらすぐに応えようと思いました。なぜ、すぐに出て行ったのでしょうか？見ていただくとおわかりのように、彼らは時間を無駄にしていないのです。というのは、いつ主人が帰って来るかわからないと彼らは思っていたから、一刻も早く、主が命じられたこの働きを始めたい、悠長なことは言っていられないと、それで彼らはすぐに働きを始めているのです。ですから、皆さん、我々信仰者も主からいろいろな賜物を与えられている。そのことを私たちはこのローマ書 12 章を通して学んで来ました。いろいろな霊的賜物を与えられています。大切なことは、いただいたその瞬間からそれを用いるということです。このふたりのしもべたちと同じように。なぜなら、この主が備えてくださった務めは主から与えられた大切なものであり、すばらしい特権だからです。彼らは主が命じたことを忠実に行なおうとするわけです。

ところが一タラント預かった者はそのようにはしませんでした。24-25 節を見ると、びっくりするようなことばが彼の口から出ています。「ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。:25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』、どこに問題があったのでしょうか？このしもべは自分の主人のことをわかっていないのです。自分の主人は自分を苦しめてそこから利益を得るような貪欲なお方であると、そのように見えています。主人のことがわかっていない。同時に、この主人から与えられた務めが自分に与えられたすばらしい特権であると思っていないのです。しかも、彼は何もしていなかったのです。自らの怠慢さに対してさばかれることなど決してないと思っているのです。ここに出て来ている一タラント預かったしもべは、救われていない人の特徴です。主のことを知らないのです。主に仕えようもしないのです。そして、自分のやっていることを決して悪いとは思わないのです。却って、自分のやっていることは正しいことであると思っているのです。自分の好きなように生きることが正しいことだと。

主がこのようにたとえで話されたように、パウロが今日のテキストで私たちに教えることは、私たちにとって必要なことは、今日という日を無駄にしないということです。明日のことはだれにも分かりません。でも分かっていることは、この日を神はくださった。この日を無駄に過ごさないということです。

4. 霊に燃え 11 節

もう一度ローマ 12 章に戻っていただいて、二つ目に「**霊に燃え**」と出て来ます。これは、私たち人間の霊が燃えるというよりも、私たちに内住しておられる聖霊なる神が燃えているということです。そのことをパウロはここで記しているのです。なぜなら、内なる聖霊が燃えている、つまり、聖霊が喜んでいときは私たちの霊まで喜びます。主に用いられた人たちに共通していることは、まさに、ここに記されているように、彼らのうちで聖霊は喜んでい、彼らのうちで聖霊なる神は働いていたのです。神はそのような人たちを大いにお用いになったのです。皆さんもそのようにして主によって用いられるのです。そのためには、聖霊を喜ばせることであって、聖霊を悲しませることではありません。どうすれば聖霊を悲しませるのか、皆さんよくご存じのように、私たちが罪の中を歩み続けることです。エペソ 4 : 30 に「**神の聖霊を悲しませてはいけません。**」とあります。

私たちは新しく生まれ変わった者です。それにも関わらず、かつての古い生活に心を奪われ、主に従うことをしない、また、主に似た者へと変えられていくことを拒み、みことばに従って歩んで行こうとしないなら、確実に、聖霊はあなたのうちで悲しんでいます。そして、聖霊なる神を悲しませる歩みをしている者には救いの喜びはおろか、神の祝福もありません。しかし、我々が聖霊の導きに従って行かなければ、神は私たちを喜ばれ、そして、我々を変えて行ってください。ですから、我々のうちにいる聖霊なる神が喜んでいて、喜んで働きを為しているのです。その状態を保ち続けることが必要です。

5. 主に仕えなさい 11節

そして、パウロは言います。「勤勉で怠らず」、怠惰にならず、真剣に熱心に、そして、あなたのうちの聖霊がしっかりと喜びをもっている、そのような状態で「主に仕えなさい。」と、5番目に出て来ました。実は、この「主に仕える」とは「奴隷として仕える」という意味のことばが記されています。主に奴隷として仕えなさいということです。旧約聖書の時代、だれかが奴隷を買入れた場合、このようなルールが存在しました。6年間、奴隷はその主人に仕えました。しかし7年目に奴隷は自由の身とされるのです。解放されるのです。主人はこの奴隷を解放する際に、さまざまな祝福を彼らに与えました。そのことは申命記15：12-17に記されています。「：12 もし、あなたの同胞、ヘブル人の男あるいは女が、あなたのところに売られてきて六年間あなたに仕えたなら、七年目にはあなたは彼を自由の身にしてやらなければならない。：13 彼を自由の身にしてやるときは、何も持たせずに去らせてはならない。：14 必ず、あなたの羊の群れと打ち場と酒ぶねのうちから取って、彼にあてがってやらなければならない。あなたの神、主があなたに祝福として与えられたものを、彼に与えなければならない。：15 あなたは、エジプトの地で奴隷であったあなたを、あなたの神、主が贖い出されたことを覚えていなさい。それゆえ、私は、きょう、この戒めをあなたに命じる。」、もちろん、このことは出エジプト記にも記されています。7年目に奴隷は自由の身となったのです。ところがその奴隷が主人に「：16 その者が、あなたとあなたの家族を愛し、あなたのもとにいてしあわせなので、「あなたのところから出て行きたくありません。」と言うなら、：17 あなたは、きりを取って、彼の耳を戸に刺し通しなさい。」というわけです。まさにピアスを開けたのです。そうすると「彼はいつまでもあなたの奴隷となる。女奴隷にも同じようにしなければならない。」と言います。

その当時、たくさんの奴隷がいました。ある奴隷は7年目を待っていたかもしれませんが、でも、ある奴隷は耳に穴が開いているのです。それは何かをつけるためではなく、彼らは自分の主人を愛するがゆえに、私は喜んで自分から進んでこの主人の奴隷としてこれからも仕えて行くと、そのことを決心した者たちです。あなたも私もそのような奴隷として歩んで行くことを神は望んでおられます。いやいやではなく神の奴隷として生きること、それは大きな祝福です。かつては、サタンに仕えていたのですから、そこから救い出されて、この神に仕える者として生まれ変わったのです。この主人は私を愛して、ご自分のひとり子イエス・キリストのいのちと引き換えに救いを与えてくださいました。日々必要を満たしてください、そして、永遠の備えまでしてください、私のためにいつも祈ってください、私といつもともにいてください、私の心を喜びで満たしてください、感謝であふれさせてくださる。このような主人からどうして離れたいと思いませんか？こんなすばらしい主人に買っていたいただいたのです。こんな主人に買い取っていただいた。こんなすばらしい主人の奴隷にいただいたのです。

問題は、信仰者の皆さん、パウロが言ったように、あなたは主があなたに命じられた働きにおいて、勤勉ですか？熱心に、あらゆる機会を用いながら、このすばらしい主の証をしておられるかどうかです。同時に、あなたは主のみこころに従うがゆえに、内住する聖霊が喜び、内住する聖霊が喜んでいて証拠として、あなた自身が喜び、あなた自身が感謝にあふれている。そのような信仰者としてあなたは主に仕えていますか？その点をあなたも私も考えなければいけません。信仰者の皆さん、パウロはここで私たちに、このような行為をすぐに実践するようにと願ってリストを挙げました。パウロはこれらを覚えなさいと言っているではありません。こういう人として今からこの行ないを実践していきなさいと言うのです。そのことを彼は望んでいるのです。そして、主ご自身も望んでおられます。

どうですか？信仰者の皆さん、あなたは兄弟愛をもって、自分の本当の家族として、群れに属するすべての人を愛しておられるかどうか？すべての人が自分よりも優れた者と思うだけでなく、そのように人々に接しておられるかどうか？そして、奴隷として主に仕える私たちは、熱心に、真剣に、機会を探りながら、そして、心が聖霊に満たされながら歩んでいるかどうか？そのような信仰者を神は望んでおられるのです。

もう一つ、そのような信仰者にあなたは変えられて行くのです。不可能なことを言っておられません。可能なことを話しているのです。では、私たちにとって何が必要なのか？どうすれば私たちはこのような歩みをするができるのか？自分の目を向けるべきところに向けることです。我々の問題はいつも自分に目を向けているのです。イエスを信じる前はそういう生き方をして来ましたが、今もずっとそう

いう生き方をしているなら、我々はいつまで経っても変わって来ないのです。我々はいつまで経っても不満から抜けられないのです。しかし、我々が主を見上げて、そして、自分のためではなく人々のために、愛する兄弟姉妹たちが信仰において成長するために、彼らがますます主に喜ばれる者になっていくために何をしましょう？と人々のために仕え始めたときに、私たちは抱えている問題から解放されて行くのです。

今もあります、私たちの中高生のクラスをJOYクラスと言いました。かつて、この礼拝堂が建つ前の古い建物の2階の奥まったところで集会をもっていました。私もその部屋に入ったことがあります、そこには「JOY」と書かれていました。「喜び」と。そして、その「JOY」の横にあることばが並んでいました。JOYのJは「イエスのJ」、JOYのOは「他の人」の意味、JOYのYは「自分自身」であると。この優先順位の通りでなければ喜びがないというのです。子どもながらに「なるほどな」と思いました。もし、あなたがイエスを第一にしていなかったら、そこにはJOYがありません。イエスを第一としていても、次に自分が来ているなら、スペルはJの次にYが来て、そして、Oが来ます。喜びではないのです。私たちに必要なことは、自分に向けている目を向けるべきところに向けることです。しっかりと主を見上げることです。私たちがパウロが教えてくれるように生きて行くために必要なことは、私たちが神によってこのようなすばらしい祝福に与ったこと、このような救いに与ったことを覚えることでした。我々はそのことを覚えることによって、この主に感謝をもって生きて行こうとします。それがすべての動機でした。そして、我々が主に感謝をして行くなれば、我々は主を愛するがゆえに、この方が喜ばれることを為して行きます。自らを捨てて主に従って行こう、自分のことしか考えなかった、自分をいつも優先していた私が、創造主を優先し、そして、私の周りの愛する兄弟姉妹たちを優先し、彼らのために生きようとしています。そのときに、主が約束された喜びをもって生きる人に変えられて行きます。

どうぞ、信仰者の皆さん、兄弟姉妹の間であって、この群れの中であって、あなたがどのように歩んでいらっしゃるのか？ぜひ、そのことを覚えてください。

有名なアイアンサイドという神学者は「何事を行なうときにも、熱心さと霊的な熱情とをもって主に仕えなさい」と言いました。いま一度、そのような思いをもって、主が与えてくださっていることを熱心に為して行こうと、そのことを決心して、そのことを願いながら、今日からまた歩んでください。

「主よ、私はあなたを愛します。もっとあなたを愛したいです。どうぞ、私を助けてくださって、私が為すことすべてにおいて、あなたへの愛が動機となって、すべてのことを為すことができるように、私を助けてください。私の為すこと、そのすべてがあなたに喜んでいただけるように、注意しながら、私は歩もうとしますから、神さま、私を助けてください。」と、どうぞ、主の奴隷として、主のすばらしさを証する器として、この一週間、遣わされているところで歩んでください。そして、私たちの主のすばらしさを心から信じ受け入れるたましいが起こされることを願いながら、私たちの務めをそれぞれ果たして行きましょう。

《考えましょう》

1. 「兄弟愛をもって互いに愛し合う」というみこころを実践するのを妨げるものは何でしょう？
2. みこころである「謙遜」を身に着けるにはどうしたらよいでしょう？
3. 謙遜な人の特徴を挙げてください。
4. 「勤勉で、かつ霊に燃えて主に仕える」ためには、どうしたらよいでしょう？
5. 「勤勉で、かつ霊に燃えて主に仕えている人」の特徴を挙げてください。